



和字正濫鈔卷一 幷序

日本紀中訓言語等字云末古登末者真也美

言之詞猶木云真木玉云真玉之類古登者與

事字訓義並通蓋至理具事翼輪相雙有事必

有言有言必有事故古事記等常多通用於心

無偽曰未古古呂於言無偽曰未古登信以弗

五常信誠也準人言爲信誠亦言成製字者不

从心从言訓字者不言未古古呂言未古登因

心之慤實全在言中。取信於外。又信古文訛也。  
案製字意言卽心也。十口以傳古雖聖不聞聲。  
何以得知情況於凡庸乎。粵金人緘口永鎖禍  
門而不開淨名結舌乍坐寂室而無動彼是世  
典此亦常教更有諸佛自證法毗盧字輪瑜伽  
字母等是其極致誰信玄妙郤在聲字請示赤  
日明證冷疑冰解涅槃經曰所言字者名曰涅  
槃常故不流守護經曰釋迦牟尼佛言我觀唵

字得成正覺。十方世界三世諸佛。不觀唵字得  
成佛者無有是處。智論曰法身佛常放光明常  
說法於戲規以畫圓未必還端本有實相流而  
布世。所以九字咒能避五兵等成辦諸事木瓜  
名及字能瘥轉筋空文妄語不知之愆譬如飲  
食無節水穀郤生疴聲字分明義趣茲彰不可  
忽緒者也。和邦者曜靈垂統之祕區天孫降駕  
之上域也。雖僻逼東垂聲韻最寥亮詳雅能通

華梵故言有靈驗。祝詛各從其所欲。神日本磐  
余彥天皇征中洲猾賊之日。祭神祇革薪水等  
名以作威稜果獲遂鴻業。如此之驗國史所記。  
神世人代不可枚舉。萬葉集曰。言靈之左吉播  
布國。又曰。事靈之所佐國。是此謂也。神氣化神。  
號曰天御柱國御柱命。息之在身猶屋之有柱。  
故以名之。莊子曰大塊噫氣其名爲風。經說息  
爲根本命金剛爲天地柱。豈徒然乎。又梵文和

舊譯音新翻音譯字。經說爲言說義。爲最上乘聲。金剛  
手菩薩位在東方亦以和字爲種子。國號懸會。  
貴言良有所以也。梵語法依音釋必不待義。故  
或曰倭奴國相傳。昔日本人入中華。中華人問  
首何國。答詞初云我國。仍譯名倭國。見于釋  
本紀。愚按五篇倭於爲切。順兒烏禾切。國名據  
此。先有此字有兩音。其烏禾切義開。後假以譯  
我國乎。和字吳音倭通。故二字通用。奴乃同。野  
鳥亦曰奴鳥。是其證也。中華人爲奴僕之奴。昧  
知方言也。雖然如此。上世淳朴而無文字。蓋待中華  
耶。譽田天皇馭宇之世。百濟國奉詔貢博士王

仁從是浸親紙墨假字記和語後及通中華逾  
究精奧然和字之學闡無所聞學書黃口者寫  
難波津之什摹安積山之唖才爲始步暨于我  
墮山準三墳字母有四十七言裁以呂波歌世  
人溥學至今則之以有限字述無窮心可謂千  
古絕妙百世依憑實我國字母也取梵文配和  
語其要有十四音謂安以宇江遠爲韻加左太  
奈波末也良和爲聲體阿雖在韻兼聲諸音本

源九聲四韻相交生三十六音摠五十音以括  
天下聲韻考萬葉集等振古省伊于要三音爾  
乃諸書與以呂波唯聚散之異而已猶有音相  
似易濫者中葉以來學識俱降且不致意遂則  
匪翹混以爲遠於等迄于四位位音寄推紀等  
志逢阿比寄藍阿木居古爲寄戀比縱令有斧正之  
手典據不明訛謬尚繁余介之懷久矣因繙曩  
編足可證粗辯樗榜以便流俗未檢的據者姑

闕不強。勒爲五卷。名曰和字正濫鈔焉。元祿癸酉二月二十有一日序。

一世よ行阿といふ人の假名文字遣といふわあち  
て。と序よ。家於中納言定家 家集拾遺愚草  
乃清書を。姻丈河内前司于時大助 親行よ。徳門炊助 これ  
る時。親行門てえ。をねに急へ。いわいきの文字す  
かくらうるはあつにうちて。も字のえわざであります  
ゑえ。おるば汝をとて。ほ字のためよ。宣わづ。まゆ  
黄門よ。門下よ。ふともう。日來す。り思ひ。うらぐるな  
り。け。バ主饗大炊 唐名 大炊。グ。門下。なの。が。出でて。でも。作れ

タラリ大抵わざにまくまよす不悉其記相叶り  
やて。列々跡をれ事。犹も文字遣を定半。就ひう  
お出是濃觸やかく行阿思案をうよ。權者の製作  
ドテ。まゝ名の極まの字を。伊呂波又宿まくら。而て。文字  
の數乃とくまによかへ。をれに。同淡のみにて。ぢ  
ね。各別乃要用よつよ。謂を。だら先をのれ。漏  
され。かくことあくアラ是非の迷を。りかへた。め。  
近て。ぬづの。ふじう。すえよ。ば。わは。じう。か

字を。あく。く。もく。く。まく。く。事。とな。ほ。い。を。よ  
よ。ま。れ。わ。そ。は。よ。か。く。よ。じ。く。よ。ま。ま。く。ふ。ハ。ス。う。よ。お  
あ。キ。よ。う。わ。て。是。き。き。を。さ。う。て。版。く。と。よ。み。下。の  
祠。そ。あ。ち。と。こ。ど。是。よ。て。准。據。す。き。元。仍。子。孫  
ホ。此。勤。勅。を。守。て。原。祕。ま。る。此。序。よ。う。に。行。り。  
祝。行。の。お。を。披。凡。ざ。れ。な。り。と。か。く。し。り。そ。は。失  
く。れ。ん。も。よ。す。こ。ず。行。ら。の。お。乃。中。よ。空。て。皆。哉。くる  
べ。れ。る。よ。混。亂。れ。お。ほ。こ。う。と。祝。行。し。世。俗。流。布。の

假名よもうせしとくるれ。又乃阿の席しれらやよ  
あやまつ出まつる。又行らぬめくられたるはわ  
はもよし混乱あり。是用のすりもこまよあらず。  
是よつて。へ撰ふべし。日本紀より。代実錄不  
じるまでの國史。舊本紀古事記萬葉集新撰萬  
葉集古語拾遺延喜式和名集のたぐい古今集  
もひき詠あままでよ。假名よ化とすべきる。あれ  
ぞえ乃びよほりて。引て是を證す。次第ハいろはよ

りて。いづら初し。膽色岩などトの字をさきづろ  
はよ仕するやすかくんぐたまよ。みの中トよあ  
い。次よ別よ載も。鶴忍のづく。上の字次第い  
ろはなう。次よか。上のづく。次よひ。是ハ中トよ  
て。音伎いぬよまづを附て。是よをれは右よ  
し。祝りのはをつまればづ。へちよけくみよる。是  
くず。次よひゑおれ。次よわは。是ハよよあつて。ハ  
まづよる。中トよみて。もはよよりて。はの字

やと安してぢづるに見えり。次よはをれく。次ようふ。  
先せまし中トよみて。ふのすうとすゆくとある  
がよ出す。それが初事のへやよはるをかく  
考そくたるよりあり。又からずハまなし。ちう字の  
本うちかあづば。例によじりうひゆる。あくべ  
きうがたもよし。由初よかくほー。次よみナキを却。  
ひろはをほー。さびーて。いの字をばまよ玉也。  
一假名の様をかくじと思ふ。先をちのちの初の

掲をかへし。ひろくーの韻字ハすべてかねづ。天竺  
乃悉曇あらえん。ソジクよ梵字をかくやうをあらへる  
びとよて。はらぐー。きく。かねづねど此國ハ  
天竺よハをちづ。聲ハかつて能通ド。ひろくー  
よハ。天竺見月など先用をついてほよ体をよ  
を。ちよへ花をアラ月をアラとやうよ先体よ  
あうかくと處よ。天竺よ代われば。是よすくてだよ  
おろく心ひぬやうをアラ。凡人のわいとひと

もう時の候との内よ風あり。夫だ三よは此れの名を優ゆ  
陀だ那なといふ。凡かの風を引ひて丹田よ下も腎うら水みず  
を擊うく。ももを起おこす。時とき断きり歯いし脣あぶら頂あぶら舌した咽のど胸むねの七しち  
ままよ筋すじ。喉のど内いのち舌した内いのち脣あぶら内いのちの筋すじ。肺はいよ依よて。核かくの音おと  
聲こゑあり。ととばば。其その數すう五十いそ音おとよも。人ひと間まの  
ののうう。又また六ろく佛ぶつ神じんよりトトハ鬼き畜ちくよも。ままで此れ  
ををかかす。又また有あ情じやうののにああづづ。凡かの本ほんよ  
りのススよ筋すじ。たゞたゞの悲ひ情じやうののああららででこれ

ももかよ歩あるる。息の字ひ。との自は鼻は。もも  
鼻は。息の通もく。ままなし。鼻は。肺はい。脣あぶら。屬す。肺はい。ハ  
全まつ。金きん。風ふ。精せい。ななれ。ハ。同どう氣き。相あわせ。感かん。一いつ。風ふ  
引ひ。肺はい。先さ。受う。る。ぬ。よ。流なが。拂は。の。出で。る。と。ばば。  
なな。心こころ。よ。从な。す。ハ。心こころ。勤めん。教けい。よ。内いのち。心こころ。よ。緩ゆる。急いそ。  
あり。眼まなこ。の。相あわせ。よ。息の。形かたち。よ。ななも。よ。今いま。  
密ひそ。寂ぢ。よ。此れ。息の。を。や。て。心こころ。と。從な。う。る。よ。あ。一いつ  
の。息の。と。く。の。よ。似そ。そ。れ。と。ま。命めい。よ。か。わ。り。

ひとすら今トクダセシモナリ。此ちを  
よく知ルハ身佛の事ア恒演説の事トモアレ  
息を出ヘテス。汝石集ニ。わ歎ノ日本ノ陀羅尼  
ナリトヘモハ陀羅尼を此モハ持ト麤ス。是  
モノの功徳を總攝ヘ。任おもろぬナリ。モ宇モ  
一字よる義を含ムモトテ。短モカ歎のほ  
きもを含ムをかくばらアリ。あくへども、歎  
よじくわざヒにナセシよく陀羅尼トヨ

ヘ。金剛語蓋菩薩を無言大菩薩といひ。言  
の文あるをさかへ。言するをうそをいふなり。乞を  
持摩訶衍祐五持の三段をめす中より如義  
言後とづいたゞハ段のやうされハ半トモ有形  
白き文あれと方像をうつてよせんとする  
。

一次よ文字の様を知ヘ。梵字ハ劫初よ梵天  
王天ニ來トテ作シテ放ニ梵字ト名付ケリ。

但凡ハ縁起のとよてづづく。うかみ此聲字法然  
トテ本有よりば放よ。法身如來大日經金剛  
頂經の中よ。字輪ふ字母不を從たまへり釋尊  
。華嚴涅槃般若文殊向きの諸經よ。又ま  
くは字母を從たまふ。大日經よ本不生故阿字  
現形<sup>スラフ</sup>とある。如來を初うてさむす  
る人多く。法は本不生等の道程よりば尔の字  
いつづ形を況<sup>シテ</sup>とある。聲字の下よ心<sup>シナ</sup>義

あり。もを実相といふ。譬<sup>ヒ</sup>ハ字ハ人の<sup>シル</sup>。音ハ  
言<sup>ヒ</sup>うち。身ハ心<sup>シル</sup>。身を形音義といふ。此<sup>シル</sup>に  
法字は相對する。凡<sup>モ</sup>の如を根<sup>シル</sup>と  
て一切法はこれすりゆすりゆす。身<sup>シテ</sup>途の後<sup>ツ</sup>  
て。法宗此域を出さるよ圓<sup>カク</sup>え經。守護經理<sup>スラフ</sup>詣釋  
經もよば。陀羅尼<sup>トロニ</sup>うち真如を生すと從たまへり。  
陀羅尼<sup>トロニ</sup>うち文字すり其功用公序<sup>イキウ</sup>を  
りてつづく。胡國<sup>カシミア</sup>よハ法妻仙人出で文字を修

り漢よりハ蒼頡鳥乃に見えて作キ。梵字より  
之にてつゝよとよハ本有の字乃縁を信く  
まくよ別りきちり。又ハ史也石本の中より  
あれと人の力にすこて取りそく。文鏡祕  
府論の序よ。空中塵中。開本有。字。龜上  
龍。演自然。文。とづり。此を河圖洛書すと  
自然の文され。ものひもすく。而くし  
此國よかゝ人文字を作り。故もかく。傳すまく  
ひてれろ。もねづるもくし

一梵字の字を悉墨云とつよ。悉墨云ハ梵語此よ  
成就と観す。是よ依て世間出世アの一切の字を  
成就され。うち。其字母四十七字あり。初よ十  
二字あり。摩多の字とつよ。摩多此よハ母と翻  
す。又點畫と。韻と。つまとづり。和語のたゆよ  
をあめを取ミハあづうにをのみ。字なし。次よ三十一  
五字あり。體文と。よ。げ申よ。初よ五類聲と。サ

文字あり。次に遍口聲とも満口聲ともひいて十  
字あり。同音濁音を除てあを取ふかとたな  
はまやらわのれ字もさむれのふ字に会きて十四  
音りり。涅槃經文字ある。善男子有<sub>ス</sub>十四音名  
爲<sub>ス</sub>字義と説うとひくよ付て。和漢の法師  
夷<sub>ス</sub>我<sub>ス</sub>うち<sub>ス</sub>なむ中<sub>ス</sub>よ信<sub>ス</sub>範法師とうふ人。今  
のナ<sub>ス</sub>まうす<sub>ス</sub>といふ。ちやあらぬ<sub>ス</sub>まるすうち。初のヌ  
字、喉音なり。そし中<sub>ス</sub>あハ口を用くえ初のあ

あ<sub>ス</sub>て微<sub>ス</sub>脣<sub>ス</sub>よ喉<sub>ス</sub>肉<sub>ス</sub>よ當<sub>ス</sub>にあもてわざとひそぢれ  
と息の出入<sub>ス</sub>よほ<sub>ス</sub>放<sub>ス</sub>よ經<sub>ス</sub>よ有情及<sub>ス</sub>非情阿字<sub>ス</sub>  
第一命<sub>ス</sub>と説たまへる<sub>ス</sub>先<sub>ス</sub>ハ此故なり。韵<sub>ス</sub>み<sub>ス</sub>あ  
亦聲<sub>ス</sub>よて豎<sub>ス</sub>よい<sub>ス</sub>にを<sub>ス</sub>き<sub>ス</sub>す<sub>ス</sub>接<sub>ス</sub>よかきた  
なはまやらわを生<sub>ス</sub>と假令<sub>ス</sub>あよ向<sub>ス</sub>る市町の  
あ<sub>ス</sub>とあ<sub>ス</sub>よ大<sub>ス</sub>筋<sub>ス</sub>あ<sub>ス</sub>とあ<sub>ス</sub>の角<sub>ス</sub>を<sub>ス</sub>す<sub>ス</sub>る  
あ<sub>ス</sub>のあ<sub>ス</sub>よあ<sub>ス</sub>な<sub>ス</sub>い。あ<sub>ス</sub>よう<sub>ス</sub>へ<sub>ス</sub>ざ<sub>ス</sub>。あ<sub>ス</sub>て  
一切の聲の初<sub>ス</sub>よて一家の高祖の<sub>ス</sub>と<sub>ス</sub>。梵文の法

字をかくよ筆を下す。元初の一時、阿なれば法字  
法音の経より種子より任持と引せどもニモ義  
あり。法音を以て阿の中より納めて失ひぬは任持  
より。法音阿より出るハ引生なり。字の義也。阿  
梵本の阿字より本不生の義あり。一切法は本有よ  
りて。今初て生ざすより義なり。此義より一切  
の義ハまずれば、又義の初よりわほとは只聲のみ  
あらばものあり。舌よ筋てねど、うろあらなり。梵

丈より字を根本の義といふ故也。本の經を  
蔚て。それより初て根をせざるが如き。阿の聲初  
てねども、ねどり。うへ脣よ筋てねども。いへよりせ  
ず。いとよく時。舌よ筋て。實初よ微尼。もののまこと  
していへといも。をはうよりもす。初よ微尼  
ものうのまことして。脣よ筋て。うをとつもく。二字  
しゆを初よめづれ。阿よりますす。もく。九聲の字。か  
もあのをす。唯のそとにあひてねど。たる

あり。喉音をぐく。牙は弱る。放よ。牙音とより。梵文  
ヨ迦を仰業の字といふ。あるの効きて外よ出  
初うればあり。またなはせよ舌音をぐく。さハ舌の本  
よ弱と。又歯よく。ぬよ歯音と。もよ。たと舌の  
中ほくよ弱て 歎<sup>あざ</sup>を彈あざ。口のまよて歎を  
強どろあり。又鼻よへ鼻よへ放よ。陀羅尼の中  
よ鼻音と。近ぢる。あり。鼻をいづく。塞ふすて。  
なにぬねの。みうちハ。かくといふれぬなり。はよハ  
共よ脣音をぐく。はハ脣の内よ弱て。經く。まハ脣  
のふよ弱て。あく。あく。こく。の七音。喉こう。舌じ。脣  
と次第して。又三内の申よ各次第あり。やらわの  
三音も。よよよ遍に聲よく。の申よ満て。いそく  
あくなり。其中よやハ喉音をぐく。舌を立て。いそく  
らハ舌音のむ極なり。舌の筋を立てたなより。  
れ歎をつくる。彈あざ。いそく。筋の舌立ち。舌を下  
齒よ著て。いそく。ば。是ハつくれば。梵文の羅字。

歴の経より。古ハ心臓も屬す。歴ハ升るを性とす  
れば。自然よれ急やう。わハ喉音もぐ。脣もをゑ  
てはの字ともり。歴脣の内よゑあらうに宿てる。  
古の二音又喉舌脣の次第なり。梵文のは。摩  
多の字を省一て梵文の字よか。省すくや。漢  
字の二水等の字。歴よ伊を加ふき。バ根となり  
字を加ふれば俱となり。曳を加ふれば計となり。遠  
城加ふれば古となり。歴伊及根。歴宇及俱。歴曳及

計。迦遠。又古より。根を引く。バ伊となり。俱を引  
けハ字となり。計を引けハ曳となり。古を引く  
ば遠となり。韻。ウドモ。摩多の聲よゆ。放。點畫も  
あり。うち韻なり。またなるよか。アリ。右よおな  
し。どうてに九。二十九。音を生一て。九合五十音  
なり。二十九。音ハ聲。韻。韻。和合一てせよ。を。九  
ね。梵文ハ字より。和合一て。よ。づ。き。バ。初。よ。き  
く。け。こ。一。よ。せ。う。字の字体。一。漢字の。ば。亥

ありぬよ。所生の音の字を画しにあり。されどりていろはハ能生所生としよゑへて出たり。九聲ハ又四韻ハ母。二十六音ハ子なり。佛波より母とひく母を生へとす。并みより生るモ摩多ありて。摩多のゆよりうりてきくけことの育生。どう此理す。儒よハ文を生んとす。體文といふ。此理よあり。又摩多ハ陰をも。并文ハ陽あり。不生の音ハに附屬物の。又摩多ハ津うり。并文を經あり。經津

立りて綱布をせざう。所生の音を業聲。せつよ。并文の字効をもて業用とする。れなり。又并文をば男をもととへ業聲をば女をもとよス。并文ハ強く。業聲ハ弱あらうなうかなり。梵語よ泥囃とひよ。天なり。囃よ伊點を加へて泥尾をひふ。男天を呼時も泥囃とい。女天を呼時も泥尾といふ。これ男女よ相應にて呼なり。うづよ此意あり。わ悟してつと。天をあまといふ。男

聲あらとひは女聲あり

一五十音圖

豎各行五音相通  
横各行同韻相通

初一行注

喉音	舌音	脣音	未舌	未脣
聲韻一体	唯韻非聲	唯韻非聲	以所生	唯韻非聲
諸音能生本	安所生	安所生	於	於
喉音	舌音	脣音	未舌	未脣
以省人	宇省于	江省工	遠省袁	初一行注

左さ	加か	安あ	喉音	舌音
夾し	夾き	以い	聲韻一体	唯韻非聲
左以切	加以切	省人	諸音能生本	安所生
夾す	夾く	宇う	喉音	舌音
左夾切	加字切	省于	聲韻一体	唯韻非聲
夾せ	夾け	江け	諸音能生本	安所生
左江切	加江切	省工	喉音	舌音
夾そ	夾こ	遠を	聲韻一体	唯韻非聲
左遠切	加遠切	省袁	諸音能生本	安所生
夾ご	夾こ	喉外	喉音	舌音
左外切	加外切	本	兼牙	本
夾ご	夾こ	安所生	以所生	以所生

良ら	也や	末ま	波ぱ	奈な	太た
良り 良以切	也い 也以切	末み 末以切	波ひ 波以切	奈れ 奈以切	太ち 太以切
良ろ 良字切	也ゆ 也字切	末む 末字切	波ふ 波字切	奈ね 奈字切	太つ 太字切
良れ 良江切	也じ も江切	末め 未江切	波へ 波江切	奈ね 奈江切	太て 太江切
良ろ 良遠切	也よ 也遠切	末よ 未遠切	波ほ 波遠切	奈の 奈遠切	太ミ 太遠切
舌	喉	脣	脣	舌	古 中
遍口 卷舌	兼舌	外重	内	未兼鼻	以所生
以所生	安	宇所生	宇所生	生	以所生

和	契	和以切	契	契切	契	和江切	契	和遠切	喉	兼脣安
										所生

右の圖梵文よ汲くつて佐多り。西城記よ法佛從に  
音を中天竺よりとどり。韻鏡序よも胡僧及  
切のめを中天竺の傍よ傍よとどり。此胡僧と云ふ  
ヨリへ胡國天竺のわうち経とぞ多くばら。時天  
竺をし胡國といひけり故。はよ終りたまへ。れ  
ちよ清々へて。梵僧を胡僧とづらうり。東寺の

衆心愚蒙申下度を傳へて。南天竺をとどり。山門  
南天竺を傳ふ。南天へ中天よ次で。東天北天より。  
音韻詳雅なり。中天ハ漢音れほく。南天ハ吳音  
おほく。假令達磨ハ此の梵語梵字よてへ。達磨  
かくのよく。東寺よハこれをたゞまとよみ。山  
門よハだくまとよみ。羅家之初祖達磨大師。合家の傳  
よ呼來わむ。これよ付て。漢音もべつ都麻。吳音  
もべつ都麻。念珠の母珠を駄都麻と  
さうハ駄都麻。子よりひもうすうちとくとくとくよ

ム羅麻<sup>ラマ</sup>。駄留麻<sup>ラム</sup>。梵語のむら。下  
の字のとよ半体の羅字をもつて、上より聲の  
字を用る理あり。而羅此半体以上の丸の上に加へる  
丁かくの<sup>ダク</sup>。鶴磨<sup>カツマ</sup>。中天<sup>カツミ</sup>。薩嚢<sup>サラン</sup>。中天<sup>カツミ</sup>。此  
等の類也。ハ本濁音の字なれば。冥<sup>モト</sup>。東寺<sup>ヒタチ</sup>の傳、  
駄羅摩<sup>ラマ</sup>。といふべし。此國にてハモトヨウメニ<sup>モト</sup>。清  
て<sup>モト</sup>。あれ<sup>モト</sup>。故冥<sup>モト</sup>。一。ちと<sup>ヘグリ</sup>。平群氏<sup>ヒタチ</sup>を稱  
謂<sup>モト</sup>。とて<sup>モト</sup>。あり。里<sup>モト</sup>。八合<sup>モト</sup>。駄留

麻<sup>ラ</sup>。支<sup>ラ</sup>。シハ<sup>ラ</sup>。あれ<sup>エシ</sup>。部<sup>ラ</sup>。人<sup>ラ</sup>。用<sup>ラ</sup>。モ<sup>ラ</sup>。  
け<sup>ラ</sup>。れ<sup>ラ</sup>。ア<sup>ラ</sup>。モ<sup>ラ</sup>。ア<sup>ラ</sup>。烈<sup>ラ</sup>。烈<sup>ラ</sup>。女<sup>ラ</sup>。聲<sup>ラ</sup>。よ<sup>ラ</sup>。  
達弭<sup>タラビ</sup>。達謎<sup>タラモ</sup>。達謨<sup>タラモ</sup>。東寺<sup>ヒタチ</sup>。ナリ。これ<sup>スミ</sup>。清<sup>スミ</sup>  
ム<sup>スミ</sup>。との<sup>ダク</sup>。山門<sup>サンモン</sup>。駄留<sup>ラム</sup>。駄留<sup>ラム</sup>。駄留<sup>ラム</sup>。  
謨<sup>ラム</sup>。とよじる。日本<sup>モ</sup>は真言宗獨り陀羅尼の  
たゞよ悉曇<sup>スミ</sup>を傳<sup>スミ</sup>。汝<sup>モ</sup>學<sup>スミ</sup>。汝<sup>モ</sup>家<sup>スミ</sup>。て<sup>スミ</sup>。が<sup>スミ</sup>  
の名目<sup>スミ</sup>。れ<sup>スミ</sup>。あ<sup>スミ</sup>。中<sup>スミ</sup>。萬<sup>スミ</sup>。密教<sup>スミ</sup>。失<sup>スミ</sup>。汝<sup>モ</sup>。悉曇  
を<sup>スミ</sup>。か<sup>スミ</sup>。ね<sup>スミ</sup>。放<sup>スミ</sup>。よ<sup>スミ</sup>。久<sup>スミ</sup>。失<sup>スミ</sup>。新渡<sup>スミ</sup>。の<sup>スミ</sup>。釋僧<sup>スミ</sup>の

達磨大師を駢茂とひよてかへ。やねよてハ耳を  
聴きうすすなり。彼方の人も又は方よみやう  
を立てぬるうへ。佛陀と菩提と梵字へ向  
かれど、音の精とくよ依て義しにじて蒙る。混  
同すべきば。汝國よて役を伎ふ舞を舞ふとくす  
まへてかべ。又伊萬々ハ晚宋よむりて。天トを  
まへ今人よ奪ひれ。統よ蒙古のくめよ全く奪  
ひて。え朝とそうちぬきぐ。わ秋の音よ變へて。

わろく成るよや韻會字彙をえりよ。玉篇な  
よの音よたゞいて。某切。音某とけりよ。切と音とけ  
をぬすおほく。然ハ某切とくづくら音の訛る  
半あらぬ。本朝ハさうより和漢の人をめりて  
音の博士をむうせたりして。はくあれうを。吳  
漢今よ替へば。又梵字にすりてた。すよ疑う  
さうのとおり。假令門のよばをどうじを。あ  
の笄五轉よて。梵字の音全く別うり。ア阿ヲ遠

かくのぶと。欽の韻の字を虞の韻の音よもじ  
ひるゑ。鴉の字アカすのあとさくあにすもて  
佐きり。今の鳥とてしをくとくさざれば足を従と  
いても誤を犯ハシメし。陀羅尼を誦ハスル者。阿闍梨  
の傳授を経ハシメて忍ハラシマよ誦ハスル。バ聲ハラハラ字を従ま  
す。章句を従ハシメて。効驗なくして却て罪を  
ひろゆすあり。さるよすりて越法ハサフとて佛大士よ誠  
めねハナヘリ。此よ准ハサウエよ。和歌ハ神佛によなむ

くわれされば殊ハシメは假名ハシメをたへて。あらわすよてむ  
くめやうよすくし

以ハシメ

余止切。吳

漢同音

而真切

吳音略

和訓萬葉

集等常用

乃都切

吳音

呂ハシメ良渚切。吳漢

同音再反

補通切。

吳音

保ハシメ

保

補通切。

吳漢同

猪移切。

略周切。

吳音

波ハシメ博何切。

吳漢同

甫勿切音弗略音

保保与救通用

保

力至切。

吳漢同

于阮切

吳音略

利ハシメ力至切。

吳漢同

于阮切

吳音略

計け  
居詣切。  
吳音

江け  
和訓。萬葉集等多用  
作可切。吳漢同音略

左さ  
漢同音

女め  
和訓。萬葉集等常用

惠ゑ  
玄桂切。

世せ  
戶制切。

吳音

和わ  
胡戈切。  
吳音

太た  
他大切。

川カ  
漢音略。  
和訓。万葉集續日本紀  
續日本後紀等並用

良ラ  
力張切。  
吳音略

爲カ  
于僞切。  
吳漢同音

久ク  
居柳切。  
吳音

加カ  
古瑕切。  
吳漢同音

礼れ  
漢音略。  
年禮切。吳漢同音略

武ム  
亡禹切。  
吳音

乃ノ  
奴改切。吳音略

也ヤ  
那。那与能通用  
余者切。  
吳漢同音

与ヒ  
余舉切。  
吳漢同音

曾ス  
漢音略。  
子登切。

奈ナ  
奴大切。  
吳音略

字シ  
于甫切。  
吳漢同音

於タ  
央闇切。  
吳音

末マ  
莫葛切。  
吳音略

右の中よへへの字よあべと人の里へる。音の  
邊へるよ依てあり。此字いろはの外古よ他古ノ  
用ふるを及乃びず。但日本紀よ霸もの字をへよ用  
弘の字せんをよ用。乃ハまとくと用へきよ能と角を  
ばへし能よべうす。或人四の字の極きわとんとども。四の  
字目を紀万葉等假名よ用へるすべてす。其  
上行假名。真書の略うりよ今と同。四の字よあ  
さうる假名。やをよ人土もうと黙へり。字のやう

文よ似す。傍古をアベズヘ。和訓を假名よ用ひる  
をかねよ依てうり。止むるより行假名よ合せてとか  
へれを漢音を用へるねられよあす。列の字の  
極きわとんとども。たまよ語まく。字根取よれの極ま  
うち列の字よあす。た行假名よ合せてとかとし  
わ語よ漢音を用ひる。日本紀ハ吳漢おもうちも  
葉ハ吳音がちよて。漢音を用ひて。代古をま  
す次よのた既よ漢音の略うりよ漢音用べうす。

何、ことをたりとひや。自倍羽違ぢりづと俗よか  
どつといひて、門の字と見つり。音訓にりよつこよみへ  
き記す。又門の字都豆切されば、<sup>レ</sup>吳音とひ人  
あり。さう同ぢれぬ文字用ふべくしき。も葉翁  
十八あ待まつを末川とかさ。續日本記より稱德天皇の宣  
命の中よし刃カ。續日本後紀より尾張連役つらを  
を哉あるよしけ字と刃うち。もうのことをうばす。キアよ  
けやうよかす。亦序假名よつとかくいきよ此字うち。

川をつとよしハはのきどうり。万葉より河津とし河門  
ともよよりに江よあすとよ人あり。わ古とん  
す序假名を思ひ合せぬ放ちり。を女よあすめむ  
りとつよしわちよ携うぬよすわち。もよめの字を  
假名よ引ゆるす。日本記より承以下かくとあるす

一序假名字體

イ 伊 口 呂

ハ 八全缺。常用之。

ニ 二全缺。  
或半字半体缺

或仁半体欽古  
筆作尗如字

亦或作𠂔<sub>ノ</sub>  
共保

ヘヘ止和

ト訓

干和訓  
全字

リ利又奴

ル流ツ乎

ワ曰欽和欽或  
作系和也

力加

ヨ與或作  
ヒ与也

夕多

レ礼ソ曾

ツ川和訓  
如前云

子如字全和訓

或作弔祔也

十奈或ラ良

ム

牟或某作  
ム此全欽

ウ宇

井如  
字

訓全南欽

ノ乃才於古筆多

ク久

ヤ也

未ケ氣欽

フ不

コ己

工江  
訓

人手テ欽女訓

サ薩

キ幾

ユ略

人訓三全欽常用之或身半欽並訓

或古本作ア混ア未詳本字

シ

之卫慧本朝古書

ヒ比

モ毛

セ世

又須或作爪爲訓欽或  
左字反須爪全字欽

片假名ヒツヨウ中子千子井等の全字あくハムク

付てゐ付たるより。左はムの作とどど。右と  
ろ従なし。右等のいろはとちよ弘は大師の作と  
てえれ。狹衣片假名までうをかくす。され  
ばその比よりももうのさむに出あつてとあるべし。  
工と卫字と音と共よ相似り故よ人おほく混亂  
してわざとくへば。卫へ慧の字や初の古筆と慧  
かやうよ。れちくかまくら中をえまくらとおけ  
まなり

一 いろは略記  
色葉雖艷 散去留遠 我世誰曾 將  
常在 有爲乃奥山 今日越天 浅夢  
不見 醉毛不爲

問ていもく。乞を弘は大師の製作とりふ。モ浅夢  
や。養ていはく先大師おにのめハセヨリ往々とい  
ひてあまゆくかきうるるれとわよ々々々々々  
のかうりをつとじ續日本後紀第ニ云法師在

於書法最得其妙。与張芝齊名。見稱草聖。後除天皇の侍内。敕より依て屏風を去て奉り行ひ。初よりすみづら御製の七言十韵の詩を賜ふ。と初云。深山居住振奇名。水玉頬容心轉清。世上草書言爲聖。天縱不謝張伯英。と終よえ。對く觀者目眩。共賞草書。咲丹青。絕妙藝能不可測。二王沒後。此僧生。既知風骨無人擬。收置祕府。最開情。二王とハ義えと歎えたり。真濟僧正の性靈集の序云。天假吾師多伎術。就中草聖最狂逸。捨大納云行成卿。勅より依て美福門の額を修徳せん。ためよ弘法大師をねう文大に以 許撰。云一心奉請弘法大師尊像。敬擎香花。之奠。驚覺而言。今件門額是大師之手書也。制草之上。露點雖消入木之中。風勢無盡。所存筋骨似有精靈。今蒙明詔。而欲下墨。則疑有贊聖跡之冥譴。更憚聖跡。而將閣筆。恐拘辭。明詔之朝章。晉退。

悲心。胡尾アラマサ。本朝文粹より成り。がやうの稱美  
教を知る。信化よりて。よちのみを究め。人  
の初め。到れど。汝はよん下よ流布して。もとを  
なす。うべし。興教大师上人。覓鑿の製作を集う  
る書を。密岩諸祕釋より。文中。以呂波略釋  
二篇あり。作名をつと。それぞれ。むねと。れんと。  
もと。おとされ。其外釋。日本紀。日本紀纂疏  
等。大师作と。行阿の。檀の。製作と。

大师をさせり。にナ七字とりふす。千載集の序よ  
そく。うぬのたくやまけふこにてとりふす。前昭  
は橘の古今祕注よとかく。いはと。ふす。拾遺  
愚草。みよア。壬ニ。系の。うよ。もと。悉曇  
字母の教。よけい。假名をとて。たくねす。もと。あ  
まく。事なく。世ろ。近の。事。もと。出世源を。の玄  
理を。次第よ述る。おぼろけの人。乃ち。と。も。あ  
す。又。七字。で。切られ。ば。行く。と。と。す。それ。又。陀羅

尼のノゾム。若巧方伎アマタニなる者。そなへたのよりよ  
くいはるすへき人アシハツシヤあり。又アゲシ。又佛法  
伝とねんすアマタニ。もしからうへまよ。すお乃やう  
ともまれアマタニ。有為の奥山アマツシマへてかくされ  
さり。やまとむすの病アマツシマ。因アマツシマのゆれよ。毎  
のゆにゆうとゆきとひよけつち。又つうはとば掌  
而薦アマタニ。初の立ちをやどてみとせうよ。つう  
はハ母の古傳アマタニ。字す母といふよけつか。うふとい  
ふをうづアマタニ。又母の義アマタニ。もじと猶アマタニ。人  
えくし。梵語のほかのノゾム。悉曇アマタニをかまふ全  
るね。又梵文の伊字。根字の義アマタニ。とよづ  
く。いがアマタニを初よてアマタニ。出され。あはざる。いわ  
く。さあとひよけうよ。万系アマタニ。まえ等アマタニ  
せ。ちよよわくに處の色系アマタニ。出アマタニ。思アマタニ。く  
せかう。時系アマタニをえてそれとおどく。ことを見て

心を知りがむをやつてあふふうごじ。後漢よ  
孔子もとつまくよ色紙へとゆく。秋の聲を  
そんで。そのおとうちを家へて。せまう。うら  
ふよ宵うれやくようかうのたやすみのま  
つり。春のこゑびさんよ度あくよきとうくくすを  
なり。言はゞきのいひて。いたれろを。ばせよ。  
こゝのとぞいふ。今こそふとづく。おれ紅  
葉をぬいて。うれづく。ぢよ限つて。うれ。

衣服の色葉抄とみ付くれ。書く。はのき  
葉のとぞいふを因ひて。初手のとぞいふを  
へし。と者といふて。とぞいふ。せきよりとぞいふと  
いふ。あり。院號どらま。あそぶ遊仙窟よ。義豈  
の字をにぎふとぞいふ。抄撰も。葉集よ。匂の字  
をかせたまくちのとぞいふ。とく仙巻の万葉抄  
よ。たべて。とぞいふ。とぞいふ。とぞいふ。と  
とぞいふ。とぞいふ。とぞいふ。とぞいふ。とぞいふ。

しかよてもうとくとくすり。榜のふり布もさすを  
き物すくなよかくハ義訓をも。又ち恆とかきてた  
ヘのほとよく。敷白とかきてあまくとよきつゝ内  
一えうち丹枝ユウカとも令丹ヨウダンとも類皆すほす  
内むるどばよハ丹ヨウはうるほすくりよれの向  
うち。初日新ハタハタ山ハタハタもあくたるを  
どり。丹ヨウあくと本ハタハタとすれど枝ハタハタの丹ヨウあくがご  
とくわくよほりよるどよりにうりてせざり  
らす。從本立名ハタハタとて。たとへば楊枝ヨウジハ楊ヨウの枝ジをくつ  
りてすりぬのみなれど。ほハ松マツ松マツモモをとてーた  
いづり楊枝ヨウジのみみミアラアラ。このよほみとくみ  
れすり。香ハラハラをにほひとつよヨシシたるよのノめ乃歎  
とすり歎ヨウすり。お葉ヨウおけ去ハタハタの字ハタハタをねのふよあほ  
くからり。へと二句ハ次の二句をいそじるもの序ハタハタ。  
た義ハタハタの中ハタハタには比ハタハタう。我世ハタハタ誰ハタハタ曾ハタハタとハふふとハノヒのよ

の我あり。さればなまこあり。誰の字日本紀不  
なんぞとづれどよもや。す名の人を後とふ  
たれうとよべ。後どといひてはトのてよをほか  
けへとすまぬ將常在うねよあくんを。仁阿切奈  
きぬひうきてつら。有乃奥山は。とを捨て  
ようり。あるのばのむ極ハ險難されバ奥山また  
よふ。今日越天とは。あるのばハ皆度滅ゆゆる  
りをかて。還源の思ひを發して。すみを

時とつみづきよこにてと人をすすめてひきよふん  
あり。物極てへゆくす多びりむられ。ふと奥を  
きそりて城をりれば又かくにやりて里よ出る  
くく。えらぶよりすればもあるよからずあり。淺夏不  
見と。世間渡近の生れのゑをかくアドとなくも  
醉毛不ちとハせ。明の酒よ醉て。生死の貪室よ  
はまとして。厭ふハ一向迷ひうち。とくわとかては  
酔星ともよ性室されど醉と曰ひ。一とが迷ひを

生ば。りまきひとせざと。やうハ法大乗教のやう  
なり。又一切れを本有薩埵菩提心と。かねれども

論文

のよきよき明よりて。醉やくて醒なり。剣伶が  
酔屈原が醒。彼をして。此をいんじよ。醉醍醐  
志きて。不二よりハ大うよはもしりん。是するも佛  
うち不<sup>ミ</sup>人<sup>ド</sup>ハ我はを持へ。不<sup>セ</sup>るハも切往をつち。  
梵書の阿字よせ不れのこゝ義あり。すハ不の字ふ  
れも。根本の伊字よ始まりて。種子の阿字の義よ

絶歸して收拾もんれ。ばかりて又始まつてあるす  
るをひと環の鴻よさびぞく。梵文よ阿を初よ  
む。因業の訶字をほよまくよ。因縁よもせざ  
れ。本不生よぬもよもわりするにほくよ。し  
終よゑの字をやうわく。ハ字母の終よ。藍と。乞<sup>キ</sup>と  
合<sup>ニ</sup>よみ二字あわ。乞を界畔の字と。藍が今用  
あうれば。乞ばくれく。乞又ハ異體<sup>ダリ</sup>の軌則を示  
す。矣。体三と。梵字のほよ別の字を二字三字

に文字まで續合きてきわろちり。乞又ハ迦と又と絞  
合せらる字あら漢字よきもやといふ一字の音をけ  
れハ乞又乞<sup>ニ</sup>ヒテ梵字よて一字ぞと迦<sup>一</sup>  
ちり。こ合等此よけ<sup>ト</sup>ヘてかべし。さやうの二字を  
もて東の一字の音ヒシテ<sup>ト</sup>。彼の二字三字を  
あいそて一音ヒナリ例を。彼乞又字すナヒ<sup>ト</sup>  
ル。うねよつまていづきの字カもあら<sup>ト</sup>。此字を一  
もおう<sup>ト</sup>ハ心ゆくへきよや。韻書よ山<sup>ト</sup>絶高<sup>ト</sup>目<sup>ト</sup>涼<sup>ト</sup>一

曰大也。又京師天子<sup>ト</sup>居<sup>ナリ</sup>又十萬<sup>タ</sup>億<sup>ト</sup>十億<sup>ト</sup>兆<sup>ト</sup>十  
兆<sup>ト</sup>京<sup>ト</sup>。とつて。梵語の摩訶<sup>ト</sup>大多勝<sup>ト</sup>のニ義<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>。  
大をりふ<sup>ト</sup>ばす。ナ犯ハ多の是残<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>。絶高<sup>ト</sup>と天  
子<sup>ト</sup>居<sup>ト</sup>ハ勝<sup>ト</sup>の義<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>。老子<sup>ト</sup>域中<sup>ト</sup>有<sup>ト</sup>四大<sup>ト</sup>。  
又一大<sup>ト</sup>を天<sup>ト</sup>。がくん<sup>ト</sup>、或<sup>ト</sup>合て<sup>ト</sup>よのにナ七字を  
讃<sup>ト</sup>。やうれ<sup>ト</sup>。又醉<sup>ト</sup>。ナ<sup>ト</sup>々々<sup>ト</sup>佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。  
併<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。佛<sup>ト</sup>。  
といふれ<sup>ト</sup>。つれ<sup>ト</sup>。あれ。社<sup>ト</sup>。ム<sup>ト</sup>。ナ<sup>ト</sup>。ト<sup>ト</sup>。ト<sup>ト</sup>。ト<sup>ト</sup>。ト<sup>ト</sup>。ト<sup>ト</sup>。ト<sup>ト</sup>。

も異駄重の様を示とのもと。都盡どぢんの義あり。  
詰字の義。此よりてあねすとされば。彼は詰  
へておうれぞ。今りふ不の義あり。さよや。又彼乞え  
にナセ字の内うち。今ハかるる。その字の波  
へとある。詰えの数かきわめて。又京ハとわ  
詰よあくねハナラ。

和字正濫鈔卷一經

